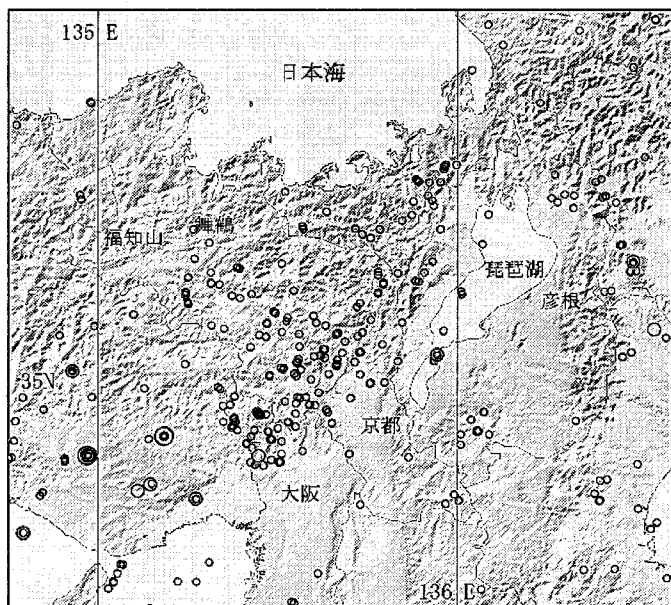


京滋地震情報

■6月■



震央分布図

2008年

6月1日

}

6月30日

マグニチュード

○ ≥ 5

○ ≥ 4

○ ≥ 3

○ ≥ 2

○ < 2

地震数
371回気象庁・大学・
防災科学技術研
究所の資料を基
に作成

岩手・宮城内陸地震の発生から1カ月がたちました。余震は減っており、大きめの余震が起こる可能性も小さくなっています。

GPS（衛星利用測位システム）データの解析などにより、余震域の南部で断層が大きくなったことが分かってきました。地震の前には活断層は知られていませんでしたが、詳しい現地調査により、地震前から活断層らしい地形が存在していたことが、名古屋大等のグループにより報告されました。

と言っても、今回の地震で表れた地震断層沿いの道路や田んぼの段差は数十センチであり、兵庫県南部地震の野島断層のずれに比べると一けたくらい小さいです。活断層の存在を示す地形も微妙なもので、精細な調査により初めて見いだされたものです。

今回の地震は、火山の近傍で発生したのですが、震源域付近でのここ10万年くらい

の地殻変動の調査によると、変形が特定の断層に集中するのではなく、うすく広い範囲に及んでいます。

一つの可能性として、平行する多数の断層が、別々の時期に少しずつずれたため、変形が広い範囲に及んだことが考えられます。このため、個々の断層の変形量は小さく、活断層の存在を示す地形も微妙であったということです。

火山では地球の深部からマグマが上昇してきますが、マグマは付近の下部地殻に水をもらいます。地震の起こった栗駒山近傍では、下部地殻にマグマがもたらした水が広く広がっており、広い範囲で下部地殻が弱くなっていたのかも知れません。

いずれにしても、このような変形の小さな断層をどのように評価するかが今後の大きな課題となります。

（飯尾能久・京大防災研地震予知研究センター教授）

＝第3木曜に掲載

岩手・宮城内陸地震の断層